

## 家持の生涯

8世紀の越中国は、律令制下で治安が整っている最北の国であった。当時の政権は収税地域拡張のため、しきりに蝦夷支配地への征討を進めており、越中国は征討軍の前進・兵站基地で会った。

越中国への国司派遣の初めは明らかでないが、現在まで48名の氏名が知られている。氏名がわかる最初の越中守は、天平4年（732）任命の田口年足で、次が天平18年任命の相伴家持である。

今からおよそ1275年前、越中の国府は伏木の高台、今の勝興寺あたりにあったと言われている。

新たな国主（今の県知事）として奈良の都からやってきた家持はまだ29歳の青年であった。

家持は大納言相伴旅人の晩年の子で、718年の出生といわれる。肉親の縁に薄く幼少で両親と別れているが、家柄と才能に加え、早くから和歌・漢詩・漢籍・法律などにわたる高い教養を身に着け、洗練された青年に育った。（14歳で父と死別し、15歳で従妹の「坂上大嬢」に初恋をする）29歳になった青年家持は、東大寺建立事業の主導権を握ることで藤原氏の圧倒を目指す橘諸兄の期待を受け越中国での東大寺墾田地確保の重責を負って国主として赴任した、当時の越中国は、能登の4群を合わせて8郡の時代である。

歌人家持にとって越中国主時代は望郷の念に駆られながらも、生涯で最も平穏かつ充実した年月だったのかもしれない。

《並めていざ打ち行かな渋谿の清き磯廻に寄する波見に》

《玉くしげ二上山に鳴く鳥の声の恋しき時は来にけり》

《朝床に開けば遙けし射水川朝漕ぎしつつ歌舟人》

天平勝宝三年（751）八月五日午前四時、家持は少納言として帰京の途に就く。

《しな離る越に五箇年住み住みて立ち別れまく惜しき宵かも》

延暦四年（785）八月二十八日、家持は任地の多賀城（宮城県）で68歳の生涯を閉じた。